今月のトピックス

特集 会社訪問 -No.28
房州物流 株式会社 様

「地元にとって必要とされる企業」強く意識 物流を通じて南房総の地域経済を支える

館山市に本社を構え、長い歴史を積み重ねてきた房州物流㈱（本間亨代表取締役）。前身となる房州海運㈱の設立（大正 10 年・1921 年）から数えて、今年でちょうど 100 年を迎えた。
同社は現在、トラック運送の他、海上輸送や建材販売、都市・LP ガス販売、船舶修理及び地元日刊紙の発行等、多岐にわたる事業を展開しており「地元地域にとって必要とされる企業」として地域住民から信頼され続けていくために、様々な取り組みを積極的に進めている。

館山で 100 年の歴史を積み重ねてきた同社。社内の温かい雰囲気も、同社の特徴のひとつとなっている

■多くの関連企業抱え多彩な業務を展開 「責任者の自主性」大事に人材を育てる

房州物流㈱の歴史をさかのぼると、大正 10 年に設立された房州海運㈱（設立当時の社名は房州白土㈱）と、昭和２年に設立された房州通運㈱（設立当時の社名は安房北条運送㈱）にたどり着く。房州海運は、歯磨き粉や研磨剤などに使用され、館山市内でも採掘された白土（はくど）を木船で京浜地区に輸送し、帰り荷として塩や砂糖、衣類などを輸送していた。もう一方の房州通運は、大正８年に館山まで鉄道が開通したのを機に、通運事業者として設立。昭和 17 年には、房総西線（現・JR 内房線）保田駅から安房鴨川駅間の 13 駅にあった運送業者を吸収合併し、房州通運が成立。その当時は、地域で生産された農産物や、切り花などを主に運んでいたという。その後、高度経済成長期を迎え、房州通運の事業の中心は通運業からトラック運送業へと変化。平成 11 年６月１日に両社は合併し、房州物流として新たなスタートを切ったのである。

４代目社長となる本間社長は、昭和 52 年に 28 歳で入社し、房州海運社長と房州通運取締役に就任。さらに２社合併後は同社の社長として、長年にわたって南房総エリアを代表する運送会社を率いてきた。

また、同社には数多くの関連会社が存在する。造船や船舶の修理などを行う極洋船舶工業㈱は、かつてこの地域でも多く行われていた捕鯨用の船の製造・修理を手がけていたが、昭和 63 年に国際捕鯨委員会（IWC）によって大型の鯨の捕獲が停止されたことが影響して経営が悪化。そのため、同社が経営権を取得し、同社のグループに入った。また、館山市をはじめとした安房地域をカバーする日刊紙「房州日日新聞」を発行する㈲房州日日新聞社、都市ガスを扱う房州瓦斯㈱など、同社の関連会社は６社を数える。

「館山市をはじめとした南房総エリアは、著しい人口減少と高齢化が進展する過疎地域です。地域の経済状況は非常に厳しく、経営が成り立たずに長年続けてこられた事業から撤退される事業者もみられます。しかし、人々の生活に密着した事業者をこの地域から失うことは、地域にとって非常に大きなダメージとなります。南房総の経済を守っていくために、この地域に必要な事業については当社がお引き受けし、グループ企業として維持してきました」（本間社長）

本間　亨　代表取締役

島野　昌弘　常務取締役

同社のトラック輸送を担う自動車部門は、館山営業所と木更津支店の２拠点体制で、大型車から小型車まで 66 台の車両を保有。県内をはじめとした首都圏に、多岐にわたる品目を輸送している。

同社の事故防止対策で出色なのは、ドライバーの「グループ化」である。業務ごとに４、５人～ 10 人程度の班を組織し、班ごとにトップを配置。トップとメンバーとの情報共有を密にすることで、安全意識高揚に繋げている。

「６月に八街市で自家用トラックによる児童死傷事故が発生した際には、事故の内容などを班の中で共有し、『プロドライバーとして、同じような事故は決して起こさない』と、ドライバー全員が決意を新たにしたところです。また、当社では『トラックドライバーズ千葉セーフティチャレンジ 2021』に参加し、ドライバーの意識高揚を図っています。加えて、本間社長が支部長を務めている房州支部で例年開催している

大型車から小型車まで 66 台を保有し、首都圏を中心に輸送を展開する

本間社長と部門責任者との面談を通じ、社内の情報共有を図っている

事故防止の観点から、点呼の際の厳格なアルコールチェックにも力を入れている

安全研修にも、ドライバーを積極的に参加させています。今後も事故防止対策を徹底し、安全輸送に努めてまいります」（島野常務取締役）

ところで、本間社長に人材育成面での取り組みを伺うと、各部門の責任者や班のトップなどを信頼し極力仕事を任せるようにしているという。

「企業の意思決定をトップダウンで行っていると、部門の責任者やその下で働く従業員たちの意見がなかなか反映されないため、モチベーションの維持が難しくなってきます。物事の捉え方や取り組み方は、人によって違うのは当たり前のことです。日々の仕事を通じて、その責任者が信頼できる人間であるかどうかを見極めた上で仕事を任せたほうが、当人の成長に繋がるのです。経営者としては、『何かあったときには責任を持つが、普段から細かいことは言わない』というスタンスで、責任者の自主性を育むように心がけています」（本間社長）

人口減少と高齢化が加速する南房総エリアでは、若者にとって魅力的な職場が限られることもあり、高等学校を卒業すると多くの若者が東京近郊に移住してしまう状況がある。そのため、同社でも若年ドライバーの確保に苦しんでいるという。

「運送業界はよく『3K（きつい・汚い・危険）』と言われ、若年層やその親御さんから敬遠されることも少なくありません。館山営業所のドライバーには 20 代がおらず（最も若いドライバーは 31 歳）、ドライバーの平均年齢は 49 歳と高くなっています。今後も当社が事業を継続していくためには、有望な若者を採用できるような工夫をしていかなければならないと感じているところです。一方で、中高年のドライバーについても、かつては就職後 20 年、30 年と長年頑張ってくれる人が多くいましたが、今はなかなか定着しない状況にあります。トラック運送業界においてもドライバーの『働き方改革』の必要性が叫ばれている中で、当社では従業員にとって働きやすい職場づくりを加速させ、従業員の定着率向上と若年ドライバーの確保を図っていきたいと考えています」（島野常務取締役）

同社では以前から高速道路を積極的に活用し、ドライバーの拘束時間削減に繋げている。また、荷待ち時間の削減などを通じて時間外労働のさらなる縮減を図るほか、有給休暇の取得推奨など、ドライバーにとって働きやすい職場づくりへの取り組みを進めている。

また、令和元年９月に発生した台風第 15 号（房総半島台風）では、暴風による家屋損壊や長時間にわたる停電など、南房総エリアに深刻な被害をもたらした。
同社では、南房総市の避難所などに千葉県との協定に基づく緊急輸送を精力的に展開。多くの地域住民に、トラック運送業界の高い社会的役割が再認識されることとなった。

「房総半島台風における緊急物資輸送の際には、被災者の皆様から温かいお言葉を数多く頂戴しました。当社のドライバーは、地元の皆様から寄せられた思いを胸に、エッセンシャルワーカーとして日々の輸送にも取り組んでいます。南房総の経済状況は依然として厳しい状況にあります。しかしながら、当社としては『この地域の貨物輸送を守り抜く』という、地域にとって重要な社会的役割を果たし続けていくために、懸命に取り組んでいかなければなりません。地域の皆様方のおかげで、房州海運の設立から 100 年という大きな節目を迎えることができましたが、我が国の物流を取り巻く環境が大きく変化している中にあっても、『長年事業を展開してきた地元地域の中で、いかにトラック運送業界が必要とされているか』を強く意識しながら、これからも地域に根差して社業を展開していきたいと考えています」（本間社長）

ホットにゅーす

■ 30 年来の日課としている「ランニング」社内ゴルフコンペにも精力的に参加

本間社長は退社時刻を迎えると、本社近くにある体育館に出かけ、1 周 200m のランニングコースを走るのを、30 年来の日課としている。この時間は他に走っている人が少ないため、走りに集中できるのだという。

「今でも週に４、５日は走るようにしています。いつもランニングしてから帰宅するのですが、体を動かした後の夕食はとてもおいしいです」（本間社長）

また、本間社長はゴルフも趣味としており、同社・グループ会社の社員らによる「社長杯ゴルフコンペ」にも多く参加している。

社内ゴルフコンペで優勝し、トロフィーを手にする本間社長

企業プロフィール
房州物流株式会社
代表取締役　本間　亨
本社　千葉県館山市館山 95
従業員　111 人（ドライバー 68 人）
台数　66 台